

当センターの入院診療は回りハ病棟 100 床のみですが、岩手県は四国に匹敵する広さをもつ一方で、リハビリテーション医療については回りハ病棟をもたない医療圏が複数あり、回りハ病棟をもつ病院では圏域を跨いで患者さんの受け入れ対応が必要な実情があります。県央・盛岡市西の雫石町に位置する当センターでも、県内遠方の患者さんの入院を数多く受け入れていますが、そうしたケースでは退院前訪問指導をとっても片道で 100km を超える場合が珍しくなく、往復所要時間は 5、6 時間と、一日がかりの訪問仕事になります。

しかし、多職種がチーム総がかりで入院中に高めた ADL、生活機能を退院後も長く保てるよう、乏しいなりに最大限、地域の資源を一人ひとりに繋いでいくよう連携しながら、自宅・地域での生活継続、安定化に向け、患者さんファーストを掲げ、チームで日々支援しています。

近年は実績指数、入院時重症患者割合引き上げなどが相次ぎ、当センターでも従前以上に数多くの重症患者を受け入れています。そうした中には回復を可視化するアウトカムが思うように上向かない方もいらっしゃいます。それでも、できる限り ADL 向上に各職種が働きかけ、生活期の QOL の向上、介護者の負担軽減を目指し、退院前カンファレンスで生活期スタッフとの協議を詰め、安心・安全な生活継続に向けた環境整備、ケアプラン構

築に努めています。

当センターの入院患者の平均年齢は 65.5 歳、約半数が 10 ～ 60 歳代の若年層であり、現役世代の復学・復職、運転再開支援など高い社会復帰のニーズに応えるべくチームで介入するケースが一定数あります。そうした支援の多くは中長期的であり、回りハ病棟退院後も当センター外来での支援継続が必須です。これらのゴールの達成は年間 30 例程度ですが、最終的に地域の活性化、労働力不足解決の一助になっていると考えます。

地域貢献という意味においてもさまざまな関係機関・関係者と縦横に連携を深め、支援の要る患者さんを制度で包み込めるよう、スタッフ個々の連携力のスキルアップが重要です。

回りハ病棟は届出数が 9 万 5,000 床を超え各都道府県の人口 10 万対病床数も所期目標の 50 床を上回り 70 床を超えた今、

地域における回復期の立ち位置を確立するために各施設が提供する回復期リハビリテーション医療の質向上と連携強化はすべての地域、すべての回りハ病棟保有施設で喫緊の課題といえます。

2024 年度診療報酬改定後、「新たな地域医療構想等に関する検討会」で始まった急性期・回復期・慢性期の各種病棟機能見直しの議論の推移も念頭に、さらなる診療連携と質的向上を共に考える年にしたいと考えています。本年も会員の皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

巻頭言

さらなる診療連携と 質的向上の取り組みを



さとう よしとも
佐藤 義朝

当協会理事

(いわてリハビリテーションセンター 長 医師)